

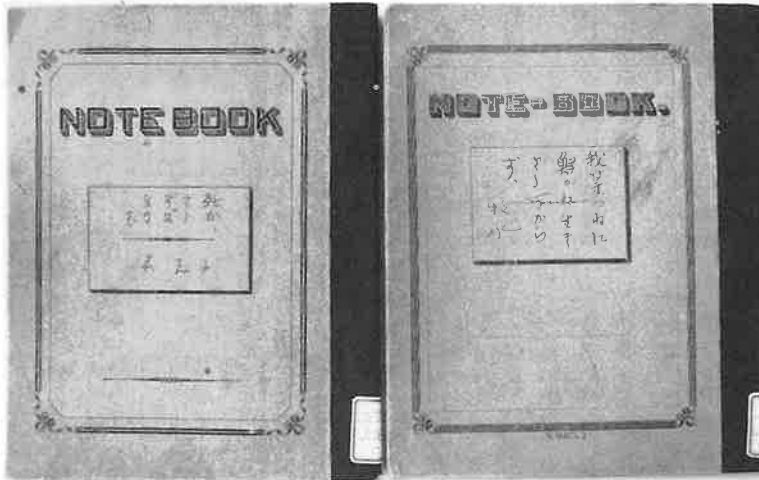
# 沼津市若山若水記念館

第五號

1990.9.1.

編集・発行 社団法人 沼津牧水会

〒410 沼津市千本郷林1907-11 Tel(0559)62-0424



喜志子の日記

牧水の日記



新婚当時に住んだ森本酒店  
(写真は昭和40年頃のもの)

## 日記帳二冊

昔どこでもよくみかけた同じタイプの雑記帳二冊、一方の表紙には牧水の筆跡で、「我等つねに鮮やかに生きざるべからず」とあり、もう一冊は喜志子の手で「死かざらば生きむ」と書かれている。二十八歳の牧水と二十五歳の太田喜志子が、同棲を始めたばかりのときの、毎日の暮らしを克明に綴った実に貴重な日記である。牧水の日記は明治四十五年六月二十九日から始まり、余白を半ば以上残して七月十日で終わっている。会った友人や訪れた場所などその日の行動が牧水らしくたんとと写実的に記されており、「牧水全集・第十一巻」にすでに発表されている。しかし、喜志子の日記は長く若山家の書庫にあったもので、その後沼津市若山牧水記念館の収蔵庫に収められた。今のところ実際に手にとって読んだ人は限られた二三人だけである。

故郷の信濃広丘村に居た太田喜志子は、牧水の熱心な求婚と執拗な家出のすすめに従い、風呂敷包みひとつを抱え母には近所の歌会に行くと言い、単身東京へ走ったのだ。二人の新しい生活は新宿二丁目森本酒店の二階十畳の部屋から始まる。それが明治四十五年五月上旬のこと、翌月九日からこの日記を喜志子は書き出しているのである。夫婦としての暮らし方に未だ充分馴染んでいないせいか、夫への愛と不安を抱えて、時にも悲しく時には苛立ち、彼女の文脈は乱れ勝ちだ。だが、喜志子にそういう意図があったのかどうか、日記と言うよりは心理小説に近く、当時流行の自然主義の影響を受け、「書く」ことで自己を越えようとする強い文学意識の現れも見られる。一つの例を挙げてみよう。六月十日の記録である。「朝九時起床、随分と寝込んでしまった、階下の人たちに少々恥かしい心地がされた、牧水は早稲田文学へ「岬の歌」一百一首寄稿するための清書をする、それを一心に書いてゐる無念無想の顔は実に尊いものである、と針を持つ手を止めては幾度も見てゐた。キスしたいのだ、けれどまだまだ私の血は何か固い意地の悪いものが潜んでゐて、それまでに思い込んだ事を為さしてくれぬ、悲しい女である、やがて全てにそれをひいてゐるらしい」

なんといつてもこれまでは厳しくしつけられた地方の旧家の子女である。みづから選んだ新しい生き方を、文学志向の女性心理で観念的には認めるとしても、現実には家出して男と暮らし、生計のために遊女の着物を縫う異端の日々は、眩しさと哀切を極めたに相違無い。しかも牧水の内面には前の恋愛事件の傷跡があって、その鬱々たる夫の内面を喜志子はさながら鏡のように静かに正確に受けとめていた。日記の末尾に歌が見える。「思ひししなるわが朝夕に時をおき夫みゆ青葉みゆ何なげかむや」「母の心おもひみよと我みづからをしかりて初めの夜抱かれしかな」

(上田治史)

## 特別寄稿

## 浜名湖畔鷺津での牧水ひとり旅

中尾 勇

細江町の文化協会の方たちが白秋の歌碑について牧水の歌碑も建立したいということで『若山牧水の浜名湖・鳳来寺への旅』について百十枚ばかりの原稿を書いて送った。これを機会に静岡県下の牧水の旅について徹底して書きたいと思い始めている。ここでは、細江町鷺津での牧水のエピソードを披露してみよう。

大正十五年の六月十一日付けの千葉県の細野春翠宛の手紙があつて、このなかに、「小生明後日あたりから三四日、一寸留守になる。呼吸抜きに浜名湖の岸でも歩いて来ようかと考へてゐるのだ、一つは歩けるかどうか、身体をためす心もある」と書かれていて、いよいよ牧水の浜名湖の旅近しということがこれでわかる。

大正十五年の六月二十一日の日記中に、  
「朝六時発の汽車にて出発、車中眠りつ覚めつしながら新居町駅下車、其処より船出でず、自動車にて鷺津に廻り、正午出帆、館山寺に立寄り、夕方気賀町着、吉野栄蔵君を訪ひ、とめられて泊る」とあつて、いよいよ牧水が浜名湖の周辺の町にあらわれたとする喜びがある。

牧水の紀行文『梅雨紀行』にあたってみると、こ

の湖畔の紀行には冒頭部分からかなりのエピソードがあつて面白い話となつてゐる。

牧水は当初、鷺津までの切符を買つていながら、一つ手前の新居町駅で汽車を降りてしまった。浜名湖が見えた。それで妙に心がさわいで、新居町から汽船がでるのではないかと思つて降りてしまった。

これは牧水の記憶違いで、やはり鷺津からであるということがわかつて、新居町から急遽、自動車にのつて鷺津の汽船発着所につけた。然し、すでに船はでてしまつていて、次の便の正午まで一時間半ほどは待たなければならなくなつた。

牧水のことである。早速の酒となる。朝飯を五時にすましてあつたので食欲もあつた。

待合室内の茶店にとびこんで、酒と膳をかこむこととなる。数刻がすぎて、次々と、発動機船がともづなをとぎ、棧橋を離れようとする。牧水はあわてて、切符を買つて棧橋へかけつけようとして、その茶店のお婆さんと思ひ違ひのトラブルをおこしてゐる。

茶店のお婆さんが、牧水の払いの勘定がたりないという。牧水は足らない筈はない、四五十錢ばかり茶代を余分においてきたと思つて、牧水は、「そんな筈はない、よく数へてごらん」と言う。

お婆さんは「足らんたらん、なあこれ」と掃除をしているお爺さんまで呼んで、二人で酒が幾らで、この錢はこれこれと勘定を始めている。出船が気になる牧水はそのお婆さんを放つておいて、船へのろうとする。

爺さんと婆さんが血相を変えておつかけてくる。切符売り場からも男がとびだしてくる。

船の窓からも二三の顔が何ごとがおこつたのかと顔をのぞかしている。牧水はやむなく立ちどまつて、婆さんの掌の上の四五枚の銀貨を数へてみる。

そして、「これでいいじゃアないか、四十錢ばかり多いよ」という。「馬鹿なことを」とお婆さんはいよいよとがりだした。酒が幾ら、肴が幾らと指をおり数え始める。

牧水もつられて数えてみる。そして、オヤオヤと思う。やっぱり牧水の間違いであつた。

茶代抜きにして丁度五十錢ほどたりない。茶店のお婆さんが附近の宿屋とか料理屋などに電話をかけて二三品のものをとりよせている。その勘定を牧水はうつかり忘れていたことに気がつく。すまなくなつて、牧水は帽子をぬいだ。そして五十錢銀貨二枚をお婆さんの掌にのせる。のせながらお婆さんの眼をみると、お婆さんの眼は心底からとげとげしくなつてゐた。牧水は身体中から汗がふきだしてくるのを覚えてゐる。

やがて、船はかなりに揺れながら走り始める。

船内の腰掛には十人ほどの男女が腰かけてゐる。「間違ひといふものはあるもんで」と、牧水の前に腰かけてゐる双肌ぬぎのお爺さんが牧水をなぐさめてゐる。このお爺さんは牧水が茶店で酒を飲んで



### 牧水旧居跡

大正十四年十月五日に新築入居、以後昭和三年九月十七日に亡くなるまで住まれた。沼津市市道、正しくは沼津市本字南側六十一、二番地で、名目四百五十六坪。土地代は当時で総額七千二百九十六円であったと言う。四月一日、地鎮祭、八月四日に上棟。二階二室階下九室総建坪七十九坪二合一勺。費用は二万円近くかかったとある。現在、牧水の建てた家は戦災で焼失。土地も分割され、僅かに高田さんの家の庭の正面に井戸の跡が残っているのみである。旧甲州街道を二中のテニスコート角で右折、六代松への道の丁字路の東側に当る。

いるときから二三度、牧水に声をかけていたお爺さんである。

「イヤ、どうも」と牧水はあらためて額の汗をふいている。

その肌ぬぎのお爺さんはいろいろと船中から見える山や土地のことを牧水に教えてくれる。梅雨晴れとも梅雨曇りともいいたい重い日和の日であつて、うすく濁った波の色は黒くみえていたと、牧水は『梅雨紀行』のなかに書いている。

湖を囲む低い端山の列も黒々とみえ、物洗い場ともみえる簡単な船着場に二三度船がとまって、やがて、一時間ぐらい経て館山寺についた。

牧水は裾を端折つて、例の得意の旅姿ポーズとなつて降り仕度を整える。そして、いかにも酒ずきらしいこのお爺さんに、「お爺さん、一緒に降りませんか、次の船の来る間、一杯御馳走しましょう」と誘いをかける。

お爺さんは仰山に打ち消す。

「とんでもねエ、わしはこれで気賀で降りて、其処から荷物を背負つてまだ五里も歩かなくちゃなら

ねエ」という。

牧水はこの紀行文のなかで、

「館山寺は古い由緒のある寺だとかだが、ひどくすたれて、此処ではただ新しい遊覧地として聞え出して来た、と謂つた所であつた。

殆んど鳥かと思ゆる小さな半島全体が円やかな岡となり、汀からいただぎにかけ、みっちり稚松が茂つてゐた。寺の横から岡を越えて裏に出ると、広い湖面に臨んだ小さな断崖となつてゐた。腰をおろし、帽をぬげば、よく風が吹いた。そして漸く私は、『ヤレ、ヤレ』

といふ気持になつた」と書いている。

湖にうかぶ釣舟、三味線太鼓をうちならす遊覧船。その湖が風のためか日光のためか、ほの白く輝いてみえている。

二十分をかけて、牧水は寺まで歩く、次の船までまだ二時間がある。

それで牧水は寺の前の料理屋兼旅館の山水館による。上にあがるとめんどろだということ、庭伝いに奥に通じ、山水館の縁側に腰かけて、とに角一杯ということになる。

庭先の水際の生簀(いけす)から、山水館の男が、手網で鱒(こち)をすくい出す。

「ホホウ、此処に海の魚がいるのかネ」と牧水は聞く、

「よく釣れます、今朝お立ちになつたお客様はほんの立ちがけに子鯖を二十四匹も釣つてお持ちになりました」とこたえる。

牧水は『梅雨紀行』のなかに、

「宿屋の前は背後の岡と同じ様な小松の岡にとりかこまれた小さな入江になつてゐた。入江といふより大きな淵か池である。青んで湛へた水面には岸の松樹の影がづばらかに映つて居る。其処から鱒の子を釣りあぐる……、何としても私は変な気がした。聞けば今は子鯖とかははぎの釣れる盛りだといふ。かははぎは皮剥ぎの謂(いひ)で、形の可笑しな魚

だが、肉がしまつてゐておいしい。私の好物の一つである。兎に角、浜名湖は淡水湖なりや鹹水(かんすい)湖なりやとむづかしく考へずとも、汽船で一時間も奥に入り込んで来た此処等のこの山の蔭にこれらの魚が棲んでゐるやうとはどうも考へにくい事であつた」と書かれている。

——この牧水の鳳来寺への旅は、吉野栄蔵や金沢修二とその家族への人恋いの旅であり、仏法僧の鳴き声を求めての旅である。——



〈なかお いさむ〉

昭和五年生れ、日本大学経済学部卒。静岡県教育委員会東部教育事務所指導主事、県社会教育課指導主事、足柄小学校長、などを歴任。現在、三島市立錦田小学校長、三島市教育研究会会長。著書「ふるさとの若山牧水」他多数。

# 事業のご案内とお知らせ

## 第三十七回 沼津牧水祭

### 短歌大会

三十七回を数える沼津牧水祭は、先ず短歌大会で幕を開けます。本年の講師は馬場あき子先生です。

日時 平成二年十月六日(土)十時

会場 沼津市常盤町自治会館ホール

講師 馬場あき子先生

賞 沼津牧水賞、市長賞、教育長賞、他

### 碑前祭・芝酒盛

幾山河こえさりゆかば寂しさの

はてなむ國ぞけふも旅ゆく

この碑の前で「モモクヒにフロシキモチテオリテ  
コイ、イソガニヤナルケフアササテ」こんな  
故人を偲びながら、酒を酌み交し、かつ、賑やかに  
祭りを。これが碑前祭・芝酒盛です。模擬店も多数  
です。

無料です。お知り合いの方も誘って、ぜひお出  
けいいただき、祭を盛り上げて下さい。

日時 平成二年十月二十一日(日)十一時  
場所 千本公園牧水歌碑前広場

### 音楽イベント

#### 記念館コンサート

音楽評論家 池田逸子さん(沼津市出身)企画に  
よる記念館コンサートが開かれます。

#### ●御喜美江アコーディオン・コンサート

九月八日(土)、午後六時三十分、記念館ラウンジ  
曲目はラモー、モーツアルト、スカルラツティ他



△プロフィール 御喜美江(みき・  
みえ)一九五六年東京生まれ。父親  
の影響で、四才の時からアコーディ  
オンに親しみ、伴典哉、マリアンヌ・  
プロブストに師事する。さらに本格  
的な勉強を目指し、十六才の時に、  
世界最高のアコーディオン科を持つ  
西ドイツのトロシゲン市立音楽院  
に留学した。七三年「クリゲンタ  
ー国際アコーディオンコンクール」  
青年の部で優勝、翌年にも連続で優  
勝する快挙を成し遂げる。また同年  
には「アムシュー国際アコーディオン  
コンテスト」においても、二重奏の  
部で第一位に輝いた。その後もハ  
ンノウ・国立音大ピアノ科で研さん  
を積み、八一年卒業。同年から、デ  
ュイスブルグのルール国立音大ア  
コーディオン科の講師となる。

#### ●桑形亜樹子チェンバロ・コンサート

十二月十五日(土)午後六時三十分

記念館ラウンジ

### 文化講座 当館会議室

第一回 平成二年十一月十七日(土)一時三十分

「文学の中の沼津」……興国寺城と小説……

講師 友野 博氏 歴史を学び文学を愛して

第二回 平成三年 一月十九日(土)一時三十分

「新聞記者三十年」

講師 佐野栄代氏 足で眼で耳で記事を追って

三十年

第三回 平成三年 三月十六日(土)一時三十分

「太宰治と沼津」

講師 鈴木邦彦氏 太宰治、汲めど尽きぬ魅力

### 中学生の短歌作品募集

本年度当館では市内中学校のご理解と、市教育委  
員会の後援をいただいで、初めての試みとして、主と  
して中学生を対象に短歌作品の募集をしております。  
応募の締切りは九月十二日(水)となっております。  
どのような作品が、どれくらい応募されるかと、今  
から心待ちにしております。該当のお子様のおられ  
る方、どうぞお勧め下さい。

### 特別頒布のお知らせ

牧水書「幾山河……」の短歌の掛け軸の複製  
(絹本の半切、最高級の表装です)を限定作製  
して頒布します。

価格は十万円。送料は注文された方の着払い  
です。申し込みや問い合わせは、当記念館内

社団法人沼津牧水会 事務局へどうぞ